慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「ソーシャル・サポート」研究の活性化にむけて：若干の資料
Sub Title	Toward activating "social support" research : some findings from an exploratory study
Author	南, 隆男(Minami, Takao) 稲葉, 昭英(Inaba, Akihide) 浦, 光博(Ura, Mitsuhiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1987
Jtitle	哲學 No.85 (1987. 12) ,p.151- 184
JaLC DOI	
Abstract	われわれ1人びとりの日常生活は,ロビンソン・クルーソー的に自足的に展開されているのではない.それは,なん人もの他者との関係性のうちに進展しているのである.そして,このこと自体は誰にとっても異論のない自明のことである.しかし,ひととひととの関係性をどう把えどう記述しそこにいかなる意味付与をしていくかについては多くの視角と立場とが存在している.コミュニティ心理学や社会心理学,ひろくは行動科学の領域において,近年にわかに注目を集めだした「ソーシャル・サポート」の論議も,人間の社会関係についてのひとつの"新しい"立場であり,それは「日常の社会関係に包含されている相互援助機能」に焦点をあてている.すなわち,他者から得られる具体的および精神的援助が個人の心身の健康維持と増進に深く関与している可能性に注目するのである.この可能性をめぐって理論的そして経験的な検討がある種の熱気をおびながら遂行されている.アメリカにおいてそれはとくに著しい.わが国においては,実質的な研究がようやくティク・オフしようとしているところである,といえよう.本稿では,そのティク・オフの流れに沿った,ひとつの予備的な探索的試みの結果が「資料」として報告・提示された.(1)ソーシャル・サポートが,(1)所属的サポート,(2)実体的サポート,(3)評価的サポート,および(4)尊重的サポート,の4側面にわたって問題とされた.それぞれのサポートが「実際に得られているのか」ということより.それぞれのサポートを「提供してくれると思われる他者の拡がり」が尋ねられた.いわゆる「ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ」に焦点があてられたのである.(2)大学生(2年生男女)を対象として質問紙による調査が試みられた.その結果,上記のごとく,ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズを機能別に4つに分けて検討することが現実には難しいことが判明した.すなわち,問題としたサポート・ネットワーク・サイズの4側面には経験的弁別性がほとんど認められなかったのである.測定法をかえてさらに検討してみる必要性があろう.(3)以上から,サポート・ネットワーク・サイズの全体(包括的ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ)を指標として,まずは人口学的変数との関連が追究された.(1)性,(2)兄弟数,(3)入学経路,(4)居住形態,(5)1ヶ月あたりの"自由に使えるお金",および(6)"恋人"の有無,の6特性との関連が吟味されたが,いずれとも意味のある関連は見い出し得なかった.(4)ついで,(1)大学生活に対する満足の度合い,および,(2)抑うつの程度の2種を基準変数として,それぞれに対して包括的ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ変数が持つ規定力が問われた.階層的重回帰分析の結果によれば,いずれの基準変数に対しても,そのヴァリエーションを説明していくうえで,有意味な独自の力を保持することが確認された.われわれの今回の試みにおいては,この確認が1番のポイントといえよう.(5)基準変数の「抑うつ傾向」に対しては,包括的ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ変数が「マキャベリズム志向」変数と相乗効果を発揮している事実が見い出された.マキャベリズム志向が高いひとにあっては,ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズの拡がりは抑うつを低下させる方向で関与しているように思われる.以上が,われわれの今回の試みにおける主要な結果である.それぞれの解釈にあたっては慎重な配慮が要求されよう.ひとつの事実にはちがいないが,どこまで"動かぬ事実"かについては,今回の試みだけではほとんどなにも言えぬからである.その意味において「資料」なのであり,ソーシャル・サポート研究の向後にむけて参考に供するものである. A study was conducted to explore the effects of social support on stress of college students. Social support was measured in terms of perceived support network size in four cenceptually distinct dimensions: 1) social companionship, 2) tangible aid, 3) cognitive guidance, and 4) self-esteem. Stress was assessed in terms of: 1) satisfaction with college life, and 2) depressive symptoms experienced during the preceding month. Analyses showed that there existed nearly no empirical discriminability between the four dimensions of support network size. Toward predicting the college life satisfaction and the depressive symptoms, the composite measure of support network size (over-all, perceived social support network size) was found to be significant and possess a unique effect. The meanings and implications of these findings are discussed.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000085-

	0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「ソーシャル・サポート」研究の活性化にむけて[1)]

——若干の資料——

南　隆男[2)]・稲葉昭英[3)]・浦　光博[4)]

Toward Activating "Social Support" Research

——Some Findings from an Exploratory Study——

Takao Minami, Akihide Inaba, and Mitsuhiro Ura

A study was conducted to explore the effects of social support on stress of college students. Social support was measured in terms of perceived support network size in four cenceptually distinct dimensions: 1) social companionship, 2) tangible aid, 3) cognitive guidance, and 4) self-esteem. Stress was assessed in terms of: 1) satisfaction with college life, and 2) depressive symptoms experienced during the preceding month. Analyses showed that there existed nearly no empirical discriminability between the four dimensions of support network size. Toward predicting the college life satisfaction and the depressive symptoms, the composite measure of support network size (over-all, perceived social support network size) was found to be significant and possess a unique effect. The meanings and implications of these findings are discussed.

---

1) 本稿に報告する試みは，昭和62年度 慶應義塾学事振興資金の援助による『現代人の「移行」(socio-cultural and psycho-developmental transitions) をめぐる総合的研究』(研究代表者：南　隆男) の一環として実施された.

2) 慶應義塾大学文学部助教授（社会心理学）.
3) 慶應義塾大学大学院社会学研究科研究生（社会学）.
4) 関西大学社会学部講師（社会心理学）.

個人の社会行動 (individual social behavior) のメカニズムを理解せんとするとき，いまさら言うまでもないことだが，当該の個人 (focal person) 以外の個人，つまり，彼／彼女をとりまく他者 (significant others)，との「かかわり」を無視することはできない．このことをめぐって，社会心理学研究は莫大なエネルギーを費してきた．そしてその成果の一端として，われわれは現在，一般に「対人行動の心理学」ないし「社会交換の心理学」と呼ばれるところの一定の知の体系を獲得するにいたっている．この獲得された知の一層の体系化にむけて，いま，いかなる試みが模索されているのであろうか．

われわれには，およそ3つの方向が存在しているように思われる．1つは，対人行動／社会交換の認知的な基底をさぐろうとする方向——認知社会心理学とでも呼びうる領域で，たとえば，帰属理論に依拠した実験的研究に代表される流れがそれである．1つは，対人行動／社会交換そのものの記述をより精緻化していこうとする方向——生態社会心理学とでも呼ぶべき領域で，たとえば，社会的ルールの索出の試みやソシオメトリーの現代版とも言える社会的ネットワーク分析を援用した対人行動の構造分析などがそれである．そして1つは，対人行動／社会交換の形成・変化のプロセスを記述し分析していこうとする方向——発達社会心理学と呼んでいい領域で，いまやライフスパン発達心理学的研究と呼応して次第に注目を集めつつある流れである．

これら3つの方向／流れが，まさにクロスする研究課題として，いわゆる「ソーシャル・サポート」研究が浮上してきた (Cohen & Syme, 1985; Gottlieb, 1981, 1985; 久田, 1987; House, 1981; Kahn & Antonucci, 1980; Wills, 1982).

ソーシャル・サポート (social support) とはなにか．わが国では現時点において，「社会的支援」とか「社会的援助」とかの用語で呼称されつつあ

るが，定訳はない．経験的な対応 (empirical referent) としては，「特定個人が，特定時点で，彼／彼女と関係を有している他者から得ている，有形／無形の諸種の援助」といったことがらを指し示している．

自明のごとく，これでは，いくつもの問題が噴出してくる．関係を有している他者 (significant others) をどう特定化あるいは限定するのか．関係のありようないし内容をどう把握すればよいのか——量なのか質なのか．「他者から得ている」というが，厳密に考えれば，実際に得ているということなのか，それとも，得ていると当該の個人が思っているということでもよいのか．「諸種の援助」とはいうけれども，時と場合そして優先度（必要性）とのからみをどのように考えたらよいのか，などなどの問題である（より精細な論議は，稲葉・浦・南，1988 を参照）．

実はこれらは，ソーシャル・サポート研究のまえに立ちはだかっている，そして，ひとつひとつ解決されていかねばならぬ難問である．相当の経験的蓄積をしてきたアメリカでの研究上の現在の論点は，まさにこれら難問の解決の戦略をめぐってであり，ある意味で，「ソーシャル・サポートとはそもそも何であったのか／何であるのか」が改めて問われだした局面，といってもよい状況にある (Barrera, 1986; Brownell & Shumaker, 1984; Depner, Wethington & Ingersall-Dapton, 1984; Sandler & Barrera, 1984; Sarason & Sarason, 1985; Shumaker & Brownell, 1984; Wilcox & Vernberg, 1985)．

にもかかわらず，なぜわれわれもまた，ソーシャル・サポート研究なのか．前述のごとくひとつは，社会心理学研究の，大げさに言えば“パラダイム・シフト”に向けてすこぶる挑戦的な課題をソーシャル・サポート研究が内在させているからである．すなわち，われわれもまた，能うかぎりその挑戦に応答したい，と念うからである．もうひとつは，“パターン・セッティング”の強力さに，われわれもまた引き込まれてしまった，ということが指摘できよう．すなわち，ソーシャル・サポート研究が「他者か

ら得られる諸種の援助は，個人の健康の維持と増進に正の機能を保有している」との命題検証から始まったということ——信念とか態度とかの，社会心理学（者）が通常扱う変数にくらべれば，健康の維持と増進（≒個人の生死）という変数は，あまりにもディフィニットな基準（従属）変数ではないか．それが，ソーシャル・サポートのありよういかんで左右される，というのである．ここにはいかなるメカニズムが存在しているというのか．想定されているシナリオは，いわゆる「ストレス緩衝仮説」(stress buffering hypothesis) である．仮説を支持する研究が半分，支持しない研究（つまり，直接仮説を支持する研究）が半分であり，現時点では決着がつかない (Cohen & Wills, 1985; Leavy, 1983; Thoits, 1982). (わが国においては，ウンヌンできるほどに研究そのものの蓄積をみていない.)

以上のさまざまな問題の存在を確認し，まずは，それらの整理を志向して，われわれの研究がはじまった．本稿は，その予備的な試みについての報告であり，ソーシャル・サポート研究の活性化にむけて，資料として提示するものである．

目　　的

稲葉・浦・南（1987）に詳述したごとく，変数としてのソーシャル・サポートの定義および測定には，いくつもの立場が乱立している．そして，このこと自体が研究結果に一致をみない原因のひとつとなっている．

われわれの今回の試みにおいては，錯綜するソーシャル・サポートの把えかたのうちでも，一定にコンセンサスの認められる立場 (Antonucci & Depner, 1982; Barrera & Ainlay, 1983; Caplan, 1979; Cohen & Wills, 1985; Gottlieb, 1978; House, 1981; Moos & Mitchell, 1982; Silver & Wortman, 1980) に準じて，① 所属的サポート (social companion-

ship), ② 実体的サポート (tangible aid), ③ 評価的サポート (cognitive guidance), および ④ 尊重的サポート (self-esteem), の4側面 (4 support *functions*) を取りあげてみることとした.

しかも, 4側面のそれぞれについて, 実際に得られたものとしてのサポート (enacted support) ではなく, 認知されたところの入手可能性 (perceived support) を問題とすることにした. 入手可能性をどのように問うかが, ここで問題となってくるが, われわれの今回の試みでは, 単純に, 当該のサポートを出してくれると思われる他者の存在の拡がり (support network size) を本人にたずねる方式を踏襲してみることにした. その単純さの故に, この方式にはいくつかの問題が指摘されるが, もっとも"ポピュラー"な方式をとりあえずは採ってみることとした.

以上のごとくのソーシャル・サポートの取りあげかたのなかで, 検討さるべき事項は, 以下の3点にある.

(1) ソーシャル・サポートの4側面には, どれほどの経験的弁別性 (empirical discriminability) があるのか——問題として取りあげたソーシャル・サポートの4側面の相互に弁別性が存在しないとすれば, 当然, ソーシャル・サポートを機能別に考える意味は, 実務的 (practical) には無くなってくる. ただし, なぜ弁別性がないのかの判断はむずかしい. 質問のしかた (いわゆるワーディングの問題) を含めて測定法の不適切さによるのか, あるいは, サンプル自体の特性によるのか, 理論的にはいずれの可能性も考えられる. そして, 今回1回かぎりの結果では確定しえないことでもある.

(2) ソーシャル・サポート (われわれの今回の試みでは, ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ) は, 人口学的特性となんらかの有意味な関連 (interpretable relationships) を有するのか——人口学的特性といっても, データ・ソースとしてのサンプルに依存して, 当然, 選択的なかたちで問題とされてくる. 後述するごとく, われわれの今回の試みでは,

大学生をサンプルとして，具体的には，①性，②兄弟数，③大学への入学経路，④居住形態，⑤学内サークルへの所属の有無，⑥1ヶ月あたりの“自由に使えるお金”，および⑦“恋人”の有無，の7特性が，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズに関連がありそうな人口学的変数として問題にされた．

ここでは，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズと7箇の人口学的変数との関連のありようが，いわゆる実態分析的に検討されるのであるが，そのこと自体に究極的な目的があるのではない．ひき続く，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ変数（独立変数）とほかの社会心理学的変数（従属変数）との機能的関係を検討する分析にむけての前段階として必要な分析なのである．すなわち，両者のあいだに関連が見い出されたとしたら，ひき続く分析においては，その人口学的変数の影響を除去(partial out) したい．そうすることによって，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ変数そのものの持つ独自の効果を吟味したいのである．

(3) ソーシャル・サポート（われわれの今回の試みでは，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ）を変数として取りあげることには，そもそもどれほどの実質的有意性 (practical significance) があるのか――この問いは，ソーシャル・サポートを独立（説明）変数としたときの，従属（被説明）変数に対する説明力の強さを問題とすることと同値である．そして当然に，説明力の強弱は，従属変数にいかなる事象を置くかによって，その意味づけが異なってくる．

前述したごとく，ソーシャル・サポート研究にあっては，ひとつに，その健康維持および増進機能が問われているのであり，この意味で，個人のなんらかの心身の症候 (psychological and physical symptomatology) を示す変数を従属変数から抜くわけにはいかない．われわれの今回の試みでは，抑うつ傾向 (depressive symtoms) を問題とすることとした．わが国における先行研究でもっとも“ポピュラー”に取りあげられている従属変

数だからである.

ほかに，大学生をサンプルとしたことから，彼／彼女らの大学生活に対する満足の度合いも，従属変数の1種として取りあげた．われわれの今回の試みでは，特定の理論モデルを想定してはいない．故に，検証研究の含みは皆無である．だが，大学生活への満足度を従属変数に置いたというそのことの背後には，「ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズが拡い学生は，狭い学生にくらべて，相対的により多くの諸種の援助を実際に得ている可能性があるので，問題解決もよりなされており，結果として大学生活に対する満足の度合いも相対的に高いだろう」（恐らくは，同時的に，あるいは以上の結果として，抑うつの度合いも相対的に低いであろう）といったことがらは考えられてはいる．だがしかし，このことを検証することに目的があるわけではない．重要な吟味事項は，抑うつ傾向と大学生活への満足度という2種類の事象を被説明変数としたとき，それぞれのヴァリエーションを，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ変数がどの程度に説明しうるのかの確認である.

方　法

以上の目的に照して必要なデータが，大略つぎのような手続きで収集された.

（1） データ・ソースとデータ収集

われわれの今回の試みにおいては，接近の便宜さから，とりあえず，身近かの「大学生」をサンプルとすることにした．具体的には，慶應義塾大学文学部人間科学専攻に在籍する2年生122名（男74名／女48名）を対象として，授業をとおして，質問紙により，必要なデータが収集された．いわゆる留置法のかたちをとり，質問紙の配布から回収まで1週間を置い

た.

外的妥当性の問題を除けば，当該のサンプルはすこぶるホモジニアスなセットと見なしてよく，ちなみに，内的妥当性を一定に確保するうえでは好都合であった．逆に言えば，われわれの今回の試みにおいては，たとえば高校生と大学生とでは，あるいは，健常者と障害者とにおいて，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズにちがいがみられるのか，といった比較の視点を当面含ませない，ということであるから，極端に言えば，サンプルはヒトであるかぎりにおいて誰でもよいわけであり，そのヒトに，データ収集の便宜さ（つまり，feasibility の容易さ）から，今回は「大学生」を充当した，ということである．

（2） 変数の操作化と測定

われわれの今回の試みのなかで，問題として取りあげた変数は以下である．

まずは，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ (social support network size; **SNS**) で，前述したごとく，①所属的サポート，②実体的サポート，③評価的サポート，および ④尊重的サポートの4側面を問題とし，それらの認知された入手可能性の拡がりに焦点をあてた．4側面のそれぞれに対して2問を配置することとし，具体的には，**表1**に示した項目で測定が試みられた．

基準変数として，①大学生活に対する満足 (campus life satisfaction; **CLS**) および②抑うつ傾向 (depressive symptoms; **DEP**) の2種の変数を取りあげた．CLS には10問，そして DEP には16問を配置し，具体的には**表2**および**表3**に示したごとくの項目を用いて測定が試みられた．CLS の項目は南ら (1977, 1980) に依ったものであり，DEP の項目は Zung (1965) の尺度に準じたものである．

以上の3変数 (SNS, CLS, DEP) になんらかの関連を有するかもしれ

表1　ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ (SNS)

現在の時点での，あなたと，**ほかの人びと（家族のひと以外の人間）とのかかわり**についてお聞きします．あなたには現在，**慶應大学のなかに**，以下のようなことがらでかかわりを持っていらっしゃるかたがどのくらいおられますか．あてはまる番号に○印をしてください．

・所属的サポート

① (1)　いっしょに会って，とても楽しく時をすごせる人，が……

② (5)　さびしい時などに電話をしたり，気軽に訪ねていっておしゃべりができるような人，が……

・実体的サポート

③ (2)　手もちのお金がなくなった時など，気がねなく借りられる人，が……

④ (6)　病気で学校を休んだ時など，勉強のすすみぐあいや宿題などについて連絡してくれる人，が……

・評価的サポート

⑤ (3)　困ったことや心配ごとがある時，どうすればよいか親身に助言してくれる人，が……

⑥ (7)　将来のことなど，どうしたらよいか信頼して相談に行ける人，が……

・尊重的サポート

⑦ (4)　あなたの能力や特技を認めて評価してくれている人，が……

⑧ (8)　あなたのすることに関心を持ってくれていて，やったことをほめてくれたりする人，が……

（註）　回答は，慶應大学のなかには，ひとりもいない／ほとんどいない／あまりいない／すこしいる／何人もいる／かなりの数いる，の6件法による．（ ）内の数字は，質問紙上での実際の配列順序を示す．

ぬ（あっても不思議ではない）人口学的特性（demographic characteristics; **DEMO**）として，以下の7特性を考慮してみることにした．それらは**表4**に整理したごとくの，① 性（男/女），② 兄弟数（本人を含めた人数），③ 入学経路（内部進学と現役入学／浪人），④ 居住形態（自宅／それ

表 2　大学生活に対する満足 (CLS)

あなたは現在，以下のそれぞれに対して，どのようなお気持ち（満足↔不満足）を抱いておられるでしょうか．**現時点でのあなた自身のお気持ち**にもっとも近いものの番号に○印をしてください．

① 塾内での友人関係，に対しては……
② 自分の学業成績，に対しては……
③ クラブ・サークルなどでの課外活動，に対しては……
④ 先生の，学生に対するあり方・かかわり方，に対しては……
⑤「社会人」として成長するための経験をうる機会，に対しては……
⑥ 先生との個人的接触の機会，に対しては……
⑦ 塾の食堂など厚生施設のあり方・内容，に対しては……
⑧ 教務部・学生部の，学生に対するあり方・かかわり方，に対しては……
⑨ 自分のいる専攻のカリキュラムのあり方・構成，に対しては……
⑩「慶應大学」というもの一般，に対しては……

(註)　回答は，非常に不満です／かなり不満です／どちらかといえば不満です／どちらかといえば満足してます／かなり満足してます／非常に満足してます，の6件法による．

以外)，⑤学内サークルへの所属 (所属 / 非所属)，⑥ 1ケ月あたりの“自由に使えるお金”(5万円未満 / 5万円以上)，および⑦“恋人”の有無 (有り / 無し)，の7変数であった．

しかし，表4にみるごとく，「学内サークルへの所属」状況は，なんらかのサークルに所属しているものが122名中109名 (89%) と，分布上の制限 (分布に実質的なヴァリエーションが存在しない事実) が極端であり．変数として取りあげることに意味のないことが明らかである．ちなみに，この変数は続く分析からは除外された．また，同じ理由で，年齢 ($\bar{X}$=19.99, SD=0.92) も最初から変数として取り扱ってはいない，今回のサンプルのとりあげかた (「大学2年生に」限定してデータを収集したこと) からいって，もともと年齢にはほとんど意味のあるヴァリエーションを認

表 3　抑うつ傾向 (DEP)

以下のようなことがらを経験したり思ったりすることがありますか．**ここ1ケ月間のあなたの状況**にもっともよくあてはまると思われるものの番号に○印をしてください．

① 気持ちが落ちこんでユーウツだ……
② 朝がたは，いちばん気分がよい*……
③ 泣いたり，泣きたくなったりなる……
④ 夜よくねむれない……
⑤ 食欲はふつうだ*……
⑥ ふだんよりも動悸がする……
⑦ なんとなく疲れる……
⑧ 気持ちはいつもサッパリしている*……
⑨ いつもとかわりなく，ものごとがやれる*……
⑩ おちつかずジッとしていられない……
⑪ 将来に希望がある*……
⑫ いつもよりイライラする……
⑬ まよわずに，ものごとがサッと決められる*……
⑭ 自分は役にたつ人間だ，と思う*……
⑮ 生活はかなり充実している*……
⑯ 自分が死んだほうがほかの者は楽にくらせる，と思う……

(註)　回答は，ぜんぜんない／めったにない／たまァにある／ときとぎある／しばしばある／いつでもそうだ，の6件法による．* を付した項目は，逆転スケールであることを示す．

め得ない，のである．しかも，わずかに存在するはずのヴァリエーションとても，内部進学者か現役か浪人かの「入学経路」変数のなかに吸収されてしまう，とみてよいだろう．

ほかにもう1箇，基準変数である「大学生活に対する満足」および「抑うつ」の度合いを規定しているかもしれぬパーソナリティ変数のひとつとして，マキャベリズム志向 (Machiavellian orientation; **MAC**) を取りあげ検討してみることとした．マキャベリズム志向と2種の基準変数との関連

表 4　人口学的変数 (DEMO)　　(n=122)

変　数	頻数 (人)		構成比 (%)	
① 性				
男	74		60.7	
女	48		39.3	
② 兄弟数				
1　人	66		54.1	
2　人	44		36.1	
3　人	11		9.0	
4　人	1		0.8	
③ 入学経路				
内部から進学	7	50	5.7	41.0
現役で入学	43		35,3	
1浪で入学	57	72	46.7	59.0
2浪で入学	15		12.3	
④ 居住形態				
自宅／1戸建て	62	81	50.8	66.4
自宅／マンション	19		15.6	
自宅外／マンション	9	41	7.4	33.6
自宅外／アパート	25		20.5	
自宅外／間借り	3		2.4	
自宅外／寮	4		3.3	
⑤ 学内サークルへの所属				
所　属	109		89.3	
非所属	13		10.7	
⑥ 1ケ月あたりの“自由に使えるお金”				
5万円未満	62		50.8	
5万円以上	60		49.2	
⑦ “恋人”の有無				
有　り	59		48.4	
無　し	63		51.6	

(註)　以上7変数のうち，「⑤学内サークルへの所属」変数は，分布上の制限が極端であるため最終分析からは除外された.

表5　マキャベリズム志向 (MAC)

以下に8ケのさまざまな意見があります．あなたご自身は，それぞれの意見にどの程度，賛成なさいますか．**現在のあなたのお持ち**にもっとも近いものの番号に○印をしてください．

① だれかに「何かをしてほしい」とたのむ時には，もっともらしい理屈をのべるよりも，本当のわけを言うのが一番よい*……
② どんな理由であれ他人をあざむくことはゆるされない*……
③ 道徳的に正しいと信じた時だけ，行動すべきである*……
④ 正直はいつでも最善の策である*……
⑤ 人を扱うのに最もよいやりかたは，その人が聞きたがっていることを話してやることだ……
⑥ 「人はだれでも悪いところがあって，機会さえあればそれが表に出てくるものだ」と，考えておいたほうが無難である……
⑦ 他人を信頼しきってしまうと，とんでもない目にあうものだ……
⑧ よけいなものは切りすてていかなければ，世のなかで成功するのはむずかしい……

(註)　回答は，ぜんぜんそうは思わない／どちらかといえばそうは思わない／どちらかといえばそう思う／かなりそう思う／まったくそう思う，の5件法による．
　* を付した項目は，逆転スケールであることを示す．

のありようは，仮説的には，正負いずれの方向も想定し得る．しかし，われわれの今回の試みにおいては，正負のいずれであるのかを経験的に確認することに目的があるわけではない．より興味ある確認事項は，基準変数のそれぞれに対して，マキャベリズム志向という「パーソナリティ数数」とソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズという「状況変数」とが複合して作用することはあるのか，ということである．そして，ありとすれば，その作用（相乗効果）のありようはいかなるものであるのか，を吟味することにある．

マキャベリズム志向は，Christe & Geis (1970) のマキャベリズム尺度20項目のうち，社会的望ましさ (social desirability) の点で問題がより少

ない（と思われた）8項目を選び試行してみることにした．具体的には，**表5**に示したごとくである．

（3） 分析の戦略と手続き

分析は，言うまでもないことだが，データそのものの質が許すぎりぎりのところで，検討すべき事項に合せて，適宜，もっとも好都合の戦略を援用するのが原則である．われわれの今回の試みにおいては，結果的に，以下のようであった．

まずはじめに，使用した測定用具 (measure) の信頼性をチェックする．ここで問題とされるべき測定用具は，① SNS，② CLS，③ DEP，および ④ MAC，の4測度である．ここでは，それぞれの測度を構成する項目間の均質性 (homogeneity reliability) を問うかたちで，Cronbach の α 係数を算出する．α 係数が高い（1に近い）のが望ましいことはもちろんだが，問題は下限をどこに引くか，である．われわれの今回の試みにおいては，“試み”(preliminary exploratory study) ということに傾斜させて，下限をゆるやかに設けることに決めた．具体的には $\alpha=.50$ 以上を，許容するぎりぎりの信頼性水準とした．つまり，α が .50 未満（.49 以下）であった測度およびそれによって測定された変数は，不本意ながら，ひき続く分析には取り込まない，取り込めない，ということである．

続く分析の第1は，SNS 変数の4側面 (4 functions) が相互に，経験的に（実際的には）どの程度まで弁別しているのか，の検討である．経験的弁別性のチェックにむけては，一般に，2つの戦略があり得る．われわれの今回の試みを例にとれば，そのひとつは，SNS の8項目に対して，アタマッから4因子指定の因子分析を適用する方向——はたして，想定したとおりの構造に項目が収まってくるか，を吟味するやりかたである．もうひとつは，理論的な枠組み (SNS を4側面に分けて概念化したこと) に準拠して，その相互連関を分析していく方向——相関係数を算出し統計的

に有意な関連の有無をみるやりかたである.

われわれの今回の試みにおいては，理論的とまでは言えずとも，一応，SNS を最初から4側面に区分して考えているので，後者の相関分析の方向を採用する.（側面を想定せず，というよりも想定を一切置かずに，考えついたかぎりのソーシャル・サポート機能ないしは事態を項目化して測度を作成した場合には，前者の因子分析の方向に委ねたほうが，より得策であろう．もちろん，この場合は，事後的に SNS の側面が決定され，そして決定されたその側面相互の弁別性が問題とされるわけである.）

この分析の結果，問題にした SNS 4側面に経験的弁別性が認められないとしたら，それは，少なくとも今回は，SNS を機能別に考えていくことには意味のないことを示唆する．そしてその場合には，以降，8項目を足しこんだ合計得点のみを指標（包括的 SNS）として採用していくことになる.

続く分析の第2は，SNS 変数と DEMO 変数の関連の検討である．ここでは2種の分析により検討を試みる．ひとつは，6箇の DEMO 変数を個別に独立変数として扱い，SNS 変数を従属変数とした1元配置の分散分析であり，もうひとつは，6箇の DEMO 変数を説明（独立）変数として一括して扱い，SNS 変数を被説明（従属）変数とした重回帰分析である

重回帰分析においては，「兄弟数」を除く残りの5箇の DEMO 変数は，1/0 型のダミー変数に変換して回帰式に投入される．具体的には，「性」は男を1女を0に，「入学経路」は内部進学と現役とを1浪人を0に，「居住形態」は自宅を1それ以外を0に，「1ヶ月あたりの“自由に使えるお金”」は5万円以上を1に5万円未満を0に，「“恋人”の有無」は有りを1無しを0に，と変換された.

最後の分析は，われわれの今回の試みにおいていわば“詰め”の分析であり，CLS および DEP のヴァリエーションを説明するうえで SNS 変数は実質的にどの程度の意味を持っているのか，の検討である.

ここでは階層的重回帰分析 (hierarchial regression analysis) が援用された．階層的重回帰分析の手順は，大略，つぎのようである．まず，あらかじめ決定されている順序にしたがって説明（独立）変数がつぎつぎと回帰式に投入されていく．そして，新しく説明変数を投入したその都度，決定係数 (R^2) が算出される．すなわち，ある特定の説明変数の追加によって R^2 がどれだけ増大したかが吟味されるのである．もしこの増分が十分に大きなものであれば，新しく追加した変数は，先行する（前段階で投入された）変数の効果とは独立でしかもユニークな説明力を示したことを意味する (Cohen and Cohen, 1975).

われわれの今回の分析においては，説明変数は4段階のステップにしたがって回帰式に投入された．第1ステップでは，「人口学的変数」だけから被説明変数である CLS および DEP のそれぞれがどれだけ説明可能かを検討すべく，①性，②兄弟数，③入学経路，④居住形態，⑤1ヶ月あたりの“自由に使えるお金”，および⑥“恋人”の有無の6変数が一括して投入され，R^2 がもとめられた．第2ステップでは，上記6変数に「パーソナリティ変数」である MAC を加えた7変数で分析がおこなわれた．そして，MAC を追加して投入したことによって R^2 がどれだけ増大したかが吟味された．以下，同様の手続きをくりかえして，第3ステップでは，「状況変数」である SNS を追加した8変数で，そして最終段階の第4ステップでは，MAC と SNS の「相乗効果」変数（それぞれの得点を標準化してかけ合せたもの）を追加した9変数で，それぞれのステップごとに R^2 がどれだけ増大したかが吟味された．

結果と考察

結果は，以下に整理したごとくであった．分析の順にしたがって概覧しながら考察をも加えていくことにする．

(1)　測定用具の信頼性はどうであったか

表6に，①SNS，②CLS，③DEP，および④MACの4測度についての特性が記述される．“肝”となる指標は表中の右はしに示したα係数である．その値をみると，SNSを機能別に分けたときの「実体的サポート」の測度において，αが.22と極端に低く，これを構成する2問（手もちのお金がなくなった時など，気がねなく借りられる人，が…／病気で学校を休んだ時など，勉学のすすみぐあいや宿題などについて連絡してくれる人，が…）のあいだに，ほとんど均質性の存在しないことが明らかとなった．われわれの今回の試みのうちでは，なぜそうなのかは不明である．確かなことは，少なくとも今回のデータ・ソースとなった大学生たちの立場からは，われわれの想定した「実体的なサポート」の事態が同種の範疇に入るものとして把えられていない，という事実である．いずれにしても，この「実体的サポート」測度は，今回われわれが設けた信頼性水準（α=

表6　使用された測定用具の記述的特性　(n=122)

測　度	項目数	レンジ 理論上	レンジ 実際	$\bar{X}$	SD	Cronbach's α
① ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ (SNS)	8	8～48	18～48	33.51	5.18	.84
・所属的 SNS	2	2～12	3～12	9.33	1.55	.66
・実体的 SNS	2	2～12	2～12	8.25	1.42	.22
・評価的 SNS	2	2～12	3～12	7.80	1.92	.85
・尊重的 SNS	2	2～12	3～12	8.21	1.71	.80
② 大学生活に対する満足 (CLS)	10	10～60	13～48	33.31	6.54	.76
③ 抑うつ傾向 (DEP)	16	16～96	9～62	32.55	9.70	.73
④ マキャベリズム志向 (MAC)	8	8～40	13～34	22.42	4.08	.52

表 7　ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ諸変数の相互連関（相関係数）　(n=122)

変　　数	個別的SNS								機能別SNS				包括的SNS
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
・個別的 SNS													
① SNS 1（所属的 1）	—												
② SNS 2（所属的 2）	.49	—											
③ SNS 3（実体的 1）	.34	**.16**	—										
④ SNS 4（実体的 2）	**.08**	.23	**.12**	—									
⑤ SNS 5（評価的 1）	.45	.28	.58	.25	—								
⑥ SNS 6（評価的 2）	.43	.33	.48	**.17**	.74	—							
⑦ SNS 7（尊重的 1）	.45	.44	.40	.30	.60	.50	—						
⑧ SNS 8（尊重的 2）	.37	.38	.45	.28	.48	.59	.67	—					
・機能別 SNS													
⑨ 所属的 SNS（①+②）	.83	.89	.28	.19	.41	.43	.51	.44	—				
⑩ 実体的 SNS（③+④）	.27	.26	.73	.77	.55	.43	.46	.48	.31	—			
⑪ 評価的 SNS（⑤+⑥）	.47	.33	.56	.23	.93	.94	.60	.57	.45	.52	—		
⑫ 尊重的 SNS（⑦+⑧）	.45	.45	.46	.32	.59	.59	.92	.91	.52	.52	.63	—	
・包括的 SNS													
⑬ SNS 1～SNS 8 の合計（=⑨+⑩+⑪+⑫）	.64	.58	.64	.44	.80	.78	.79	.76	.70	.72	.85	.85	—

（註）「個別的SNS」①～⑧の具体的内容は，表1の①～⑧を参照のこと．ゴチックの数値は，それが統計的に有意ではない（$P>0.5$）ことを意味する．

.50) 以上に達せず，以降の分析には変数としてはとり込むことができない．

「マキャベリズム志向」測度も，$\alpha=.52$ で今回われわれが設定した信頼性水準の下限には軽うじて到達してはいるものの，決して望ましい状態とはいえない．つぎからは項目数を増やすなどの検討の要があり，ということである．

ほかの測度 (CLS, DEP, 包括的 SNS) に関してはほとんど問題を認めない．

(2) ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズの4側面には，どの程度まで経験的弁別性が存在していたか

SNS の ①個別の8項目，②機能別の4側面，および ③8項目の合計 (包括的 SNS) に分けて，それらの相互連関をみたものが**表7**である．表中の数値は相関係数であり，そのうちゴチック字体で示される数値は，統計的に有意な連関を有していない ($P>.05$) ことを意味している．

表から明らかなごとく，SNS の4側面相互には濃密な連関が存在している．ほとんどの関係が統計的に有意である．とくに，機能別 SNS の組み合せのすべての相関係数は $P<.001$ で有意であり，また，機能別 SNS のそれぞれと包括的 SNS との相関係数もすべて $P<0.001$ で有意である．つまり，SNS の4側面は，経験的にはほとんど弁別不能である，ということである．したがって，これ以降は，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズの拡がりを「機能別」に追うことを断念し，「拡がりの全体」(指標としては，⑬の包括的 SNS) で考えていくこととなる．

ところで，なぜこれほどまでに経験的弁別性が認められないのであろうか．測定法に問題があるのか，それとも，サンプル自体に潜む要因に由来するものなのか．今回の試み内では判定し得ない．いずれにしろ，稲葉・浦・南 (1988) にも指摘したごとく，ソーシャル・サポート研究の今後を

展望するとき，「いかなるたぐいのサポートがいかなる人びとにより提供されているのか」そして「いかなる内容のサポートがいかなる問題の解決により有効に機能しうるのか」を特定化することは重要にして必須の課題である．この意味からも，ソーシャル・サポートの内容の分類学（taxonomy）をより洗練させ，それにもとづいた弁別度の高い測定法を開発していく必要がある，ということである．今回われわれが試みたような聞きかたでは“ナイーブ”すぎるように思われる．

表7の相関係数のうち，有意ではなかったもの（ある意味では弁別性の認められた事態）が4箇ある．すべて個別的 SNS 同志の関係に対して認められたものであるが，それらを仔細に眺めると，項目の④（病気で学校を休んだ時など，勉強のすすみぐあいや宿題などについて連絡してくれる人，が…）あるいは項目の③（手もちのお金がなくなった時など，気がねなく借りられる人，が…）に絡んで惹き起っていることがわかる．われわれの今回の試みにおいては，両項目とも「実体的サポート」の事態として想定されたものである．結果はどうやら，この側面には，ほかの側面，とくに「所属的サポート」と「評価的サポート」の側面，にくらべて，なにか特異な性質が含まれていることを示唆しているようである．その特異性がどのようなものであるのかについては，いまのところ，われわれ自身も要領を得ない．不明である．「実体的サポート」と想定したその項目同志（項目③と項目④）も $r=.12$ と統計的には無相関の状況にあり，これが先にみた α 係数が .22 の事態に関与していることは推量がつく．だがしかし，なぜそうであるのか，つまり，「学校を休んだとき連絡をしてくれる（してもらう）」ことと，「手もちがなくなったとき金を借してくれる（借してもらう）」こととの含意をどのように解釈すべきか，については，いまのところ依然として不明である．

(3) ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズは人口学的特性と意味のある関連をみせたか

なんらかの関連を保有しているかもしれぬとして，問題にされた人口学的特性は，① 性（男／女），③ 兄弟数（本人を含めた人数），③ 入学経路（内部進学と現役／浪人），④ 居住形態（自宅／それ以外），⑤ 1ヶ月あたりの“自由に使えるお金”（5万円以上／5万円未満），および ⑥“恋人”の有無（有り／無し），6変数であった．

結果は，上記の6変数を個別に独立変数とした1元配置の分散分析においても，また，上記6変数を一括して説明変数とした重回帰分析においても，(統計的に) 有意味な関連は発見されなかった．すなわち，今回のサンプルに関するかぎりにおいて，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズの拡がり（包括的 SNS) は問題とした6種の人口学的特性のありようとは無関連，ないし，ありようには依存しない，ということである．

参考までに重回帰分析の結果を**表8**に示す．上述したとおり，いずれの説明変数の偏回帰係数 (β) も有意ではなく，決定係数 (R^2) も有意ではない．問題とした6箇の人口学的変数がソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズの拡がりに対して持つ説明力は4% でほとんど無しに等しい，のである．

なお分散分析においては，「兄弟数」「入学経路」「居住形態」および「1ヶ月あたりの“自由に使えるお金”」の4変数について，分割の基準を可能な範囲で何通りかにとって念押しをしてみたが，いずれの分割においてもソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズとに有意な関連を見い出さなかった．

以上の結果はしかし，つづく分析にむけてなんのダメジも持たらさない．ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズの拡がりは，少なくともわれわれの今回の試みにおいては，そして少なくとも問題にしたかぎりの人口学的特性とは無関連なのであるから，余計なことを考える必要性が

表 8　人口学的特性とソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズの関連（重回帰分析の結果）　(n=122)

	説明変数（人口学的特性）	$Y1$ 被説明変数（ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ） β
$X1$	性（男=1／女=0）	.05
$X2$	兄弟数（本人を含めた人数）	−.04
$X3$	入学経路（内部進学・現役=1／浪人=0）	−.09
$X4$	居住形態（自宅=1／それ以外=0）	−.03
$X5$	1ヶ月あたりの“自由に使えるお金”（5万以上=1／5万未満=0）	.15
$X6$	“恋人”の有無（有り=1／無し=0）	−.03
	R^2	.038

（註）被説明変数の「ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ」は，「包括的 SNS」（表7の変数⑬）である．β は，標準化された偏回帰係数を示した．

消失してしまった，ということである．余計なこととは，たとえば，性（男／女）とに関連があったとすれば，ひき続く分析を男と女とに分けて実施してみねばならぬ，あるいは，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズそのものが持つ影響力を推定するにあたり性（男／女）との重なり部分 (confounding) を絶えず気にしなくてはならぬ，といったたぐいのことがらである．別の言いかたをすれば，“幸いなこと”に，ここでの分析結果は，続く分析においてあり得たかもしれぬ，そしてその意味で“覚悟”もしていた作業上の煩雑さから，われわれを解放してくれた，ということでもある．

（4）ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズをうんぬんすることは，大学生活に対する満足の度合い，および，抑うつの程度を説

明するうえで，実質的にどれほどの意味を有していたか

ここでは，4ステップの階層的重回帰分析が援用されて問題が検討された．階層的重回帰分析の第1ステップは，6箇の「人口学的変数」だけで，第2ステップは，それに「パーソナリティ変数」であるマキャベリズム志向を追加した7変数で，第3ステップはさらに，われわれの今回の試みにおける最重要変数であるソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ(「状況変数」)を追加した8変数で，そして最終の第4ステップでは，マキャベリズム志向とソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズとの「相乗効果」部分が追加された．当該の分析におけるわれわれの関心の焦点は，ステップからそれにひきつづくステップでの決定係数（R^2）の変化である．変化といっても，説明変数の数が増えるにつれて R^2 も増大していくのが常態であるから，単に R^2 の値が大きくなったというそれだけではさほどにスリリングではない．重要なのは，その増分（ΔR^2）が統計的にも有意であるか否か，ということである．

結果を吟味するまえに，分析に使用した変数の相互連関をみておくのが賢明であろう．なぜなら，R^2 はひとつに，説明変数相互の独立性に依存して決まってくるからである．その性質からいって，通常われわれが扱う変数（社会心理学的な諸変数）が相互にまったく独立している，などということは，まずあり得ないことである．

表9に階層的重回帰分析に使用した全変数の相互連関が相関係数のかたちで示される．まず，説明変数同志の連関をみると，36相関係数のうち有意の関係をみせたものが9箇認められた．それらを列挙すれば以下のごとくである．すなわち，①「性」と「入学経路」――男においてより浪人が多い，②「性」と「1ヶ月あたりの“自由に使えるお金”」――男のほうがより多い，③「兄弟数」と「居住形態」――兄弟数が少ないほどより自宅居住の傾向，④「兄弟数」と「1ヶ月あたりの“自由に使えるお金”」――兄弟数が多いほどより多い傾向，⑤「居住形態」と「1ヶ月あたりの

表 9　階層的重回帰分析に使用した全変数の相互連関（相関係数）　(n=122)

変数	説明変数 ①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	被説明変数 ⑩	⑪
・説明変数											
① 性（男=1/女=2）	—										
② 兄弟数（本人を含めた人数）	−.12	—									
③ 入学経路（内部進学・現役=1/浪人=2）	−.32***	.11	—								
④ 居住形態（自宅=1/それ以外=2）	−.17	.21*	.08	—							
⑤ 1ヶ月あたりの“自由に使えるお金”（5万未満=1/5万以上=2）	−.19*	.18*	−.01	.26**	—						
⑥ “恋人”の有無（有り=1/無し=2）	−.01	−.01	.04	.07	−.11	—					
⑦ マキャベリズム志向（MAC）	−.23**	−.04	.20*	−.04	.11	−.18*	—				
⑧ ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ（SNS）	.08	−.04	−.13	−.02	.13	−.05	−.10	—			
⑨ 相乗効果（MAC×SNS）	.03	−.03	−.02	.08	.02	.04	.11	−.21*	—		
・被説明変数											
⑩ 大学生活に対する満足（CLS）	.16	−.08	−.20*	−.08	−.06	−.02	−.37***	.40***	−.04	—	
⑪ 抑うつ傾向（DEP）	.02	.09	.08	.18*	.03	−.03	.27**	−.32***	−.04	−.43***	—

* $P<.05$, ** $P<.01$, *** $P<.001$

“自由に使えるお金”」――自宅以外の居住者ほどより多い，⑥「性」とマキャベリズム志向」――男においてより高い，⑦「入学経路」と「マキャベリズム志向」――浪人においてより高い，⑧「“恋人”の有無」と「マキャベリズム志向」――恋人が存在しているひとにおいてより高い，および⑨「SNS」と「相乗効果（MAC×SNS)」――負の関係，の9箇である．これらがいかなる意味あいのことを示唆しているのかの検討は，さしあたっての重要課題ではないが，③および④をのぞけば，事後的な解釈ないし了解はそれなりにつく関連のように思われる．

説明変数として回帰式に投入すべくの以上9箇の変数の相互連関のありようを全体として眺めた場合，そこに問題とするほどの濃密な連関は認め得ない．説明変数の相互に，比較的に独立性が維持されているケースである，と判断してよいだろう．

説明変数のそれぞれと2箇の被説明変数の相互連関のありようも表9にみるごとくであるが，より精細には階層的重回帰分析での偏回帰係数（β）を問題にするほうが得策である．表9で確認しておくべきは，むしろ，2箇の被説明変数同志の関係であろう．われわれの今回の試みにおいては，「大学生活に対する満足」(CLS) および「抑うつ傾向」(DEP) の2変数は“2種”の基準変数としてそれぞれ個別に分析されている．しかし現実にはそれぞれが無関連とは思えない．因果関係まではいざしらず，共変関係を想定してみることはまったく自然のように思われる．はたして表9に2変数の関係をみると $r=-.43$ と 0.1% 水準で有意である．すなわち，現実には，大学生活に対して満足していればいるほど抑うつ傾向も低い．あるいは逆に，抑うつ傾向が強ければ強いほど大学生活に対する満足度も低い，というかたちで共変しあっているのである．この事実を念のために明記しておきたい．

さて，階層的重回帰分析の結果が整理して**表10**に示される．表に明らかなごとく，CLS と DEP のいずれに対しても，「ソーシャル・サポート

表 10　ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ変数の独自の効果（階層的重回帰分析の結果）　(n=122)

説明変数 (X)	被説明変数 (Y) 大学生活に対する満足 (CLS)	抑うつ傾向 (DEP)
	β	
・第1ステップ		
① 性	−.02	−.17
② 兄弟数	−.43	.06
③ 入学経路	.08	.01
④ 居住形態	.07	−.20*
⑤ 1ヶ月あたりの“自由に使えるお金”	−.07	.01
⑥ “恋人”の有無	.04	−.01
・第2ステップ		
⑦ マキャベリズム志向 (MAC)	−.32***	.31***
・第3ステップ		
⑧ ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ (SNS)	.40***	−.32***
・第4ステップ		
⑨ 相乗効果 (MAC×SNS)	.08	−.17
	R^2	
第1ステップ（6変数）	.064	.044
第2ステップ（7変数）	.170**	.135*
第3ステップ（8変数）	.307***	.212***
第4ステップ（9変数）	.312***	.238***
	ΔR^2	
第1ステップから第2ステップ	.106**	.091**
第2ステップから第3ステップ	.137**	.077**
第3ステップから第4ステップ	.005	.026*

* $P<.05$, ** $P<.01$, *** $P<.001$

(註) β は，第4ステップでの標準化された偏回帰係数を示す.

・ネットワーク・サイズ」を説明変数として考慮することに一定の実質的有意性の存在することが確認された．CLS および DEP のヴァリエーションは，「人口学的変数」だけからはほとんど説明され得ず（第1ステップ），マキャベリズム志向という「パーソナリティ変数」を加えてようやく R^2 が有意となってくる（第2ステップ）．以上に，さらにソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズの「状況変数」をつけ加えると，R^2 が格段の増大をみせる（第3ステップ）．第1から第2ステップ，そして第2から第3ステップにおける R^2 の増分（ΔR^2）も，CLS と DEP のいずれにおいても，ともに有意である．

マキャベリズム志向とソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズとの相乗効果を追加した第4ステップでの結果をみると，R^2 は CLS において .312，DEP において .238 と，ともに 1% 水準で有意ではあるが，相乗効果部分を追加したことでの R^2 の増分（ΔR^2）は DEP においてのみ有意である．つまり，抑うつ傾向に対しては，マキャベリズム志向のありようとソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズの拡がりぐあいとが複合的なかたちで一定の効果を及ぼしている，ということである．

この「DEP」に対する「MAC×SNS」の作用のパターンが図1に示される．図にみるごとくで，マキャベリズム志向の高低に依存してソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ変数は特異な作用を発現する．すなわち，マキャベリズム志向が低い群との対比においてものを言えば，マキャベリズム志向が高い群にあっては，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズが拡がっている事態では抑うつの程度に低下がみられ，反対にソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズが狭ばまっている事態では抑うつの程度はわずかながら高まっていく．なぜにそうなのであろうか．マキャベリズム志向が高いということは，定義により，目的達成にむけて対人関係／対人交換を手段視する傾きが強いということである．そういう人間にとって，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズが拡いとい

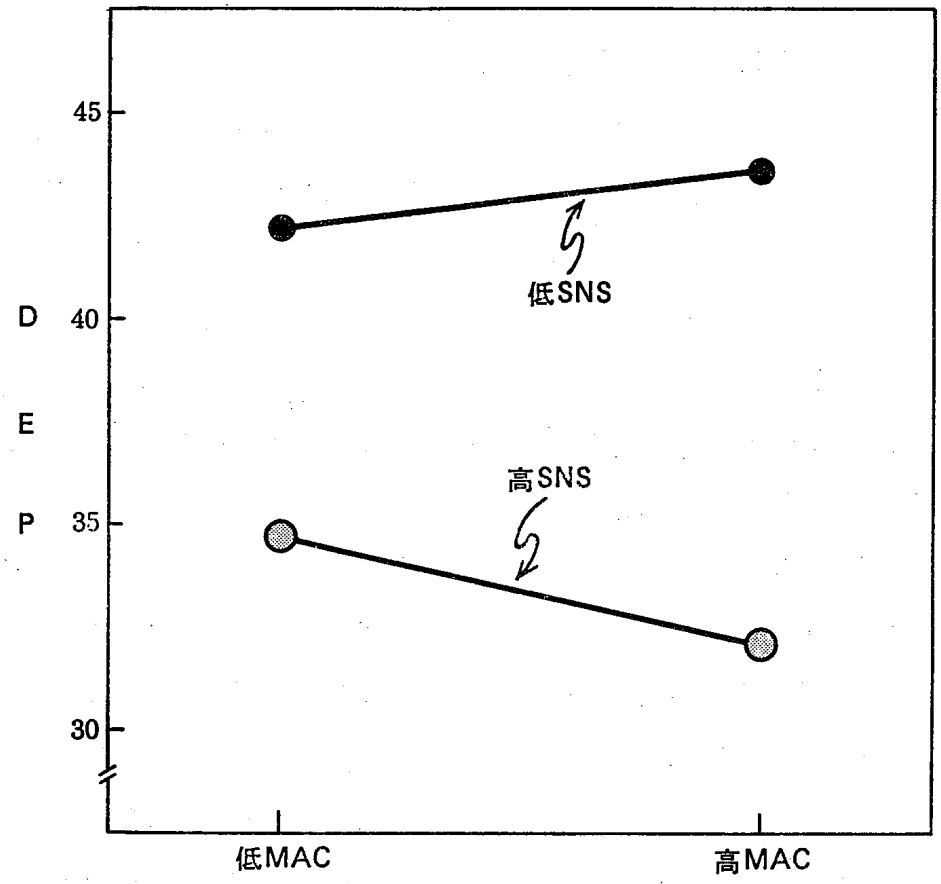

図 1　抑うつ傾向に対するマキャベリズム志向 (MAC) とソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ (SNS) の「相乗効果」(MAC×SNS) のありよう

うことは，とりもなおさず道具的に活用し得る対象が多く存在しているということであり，そして実際にそのことが実現されているが故に，結果として抑うつの程度も低まっているということであるのか．

ソーシャル・サポートの「ストレス緩衝仮説」と“強引に”関連づけようとすればつぎのような解釈も成りたつ．すなわち，同様に定義により，①「マキャベリズム志向が高い」ということは「他者とのかかわりを手段視する傾きが強い」ということである→しかし現実には，②本人が希求するほどの道具的な対人関係／対人交換の形成・維持は起こらぬであろう→結果として，③内なる「希求」と目にする「現実」との乖離のゆえに当人

は恒常的にストレスを抱えざるを得ない，といった解釈である．つまり，「高 MAC 群＝本来的にストレスフル事態」そして「低 MAC 群＝本来的には非ストレスフル事態」ということであり，ストレスフル事態の高 MAC 群においてソーシャル・サポートがストレス緩衝効果をみせた，という少しばかり皮肉的なシナリオである．

以上のシナリオは，だが，こじつけの程度がたけだけしい気もする．そして，われわれの今回の試みにおいては，もともと「ストレスフル事態」(ストレスを経験している程度) を変数として取りあげてはおらず，ちなみに，当該のシナリオの“鍵”である「高 MAC 群＝ストレスフル事態」の存否の確認のしようもない．しかし，それが100パーセント“まゆツバ”かというと，そうも断定できぬ様相も存在はする．それは，「マキャベリズム志向」と「大学生活に対する満足」とのあいだに $r=-.37$ ($P<.001$) と高い負の相関が認められることである (表9を参照)．大学生活に対して満足の低い状況（不満足状態）は，それが高い状況（満足状態）にくらべて，よりストレスフルな事態だとは考えられないか．あるいは逆に，ストレスフルな事態にあっては満足もより感じ得ないであろうと考えるのは許されないであろうか．許される程度に応じて“ツバ”の量も減じてくるであろう，というわけである．このかぼそい可能性に賭けて当該のシナリオに執着するなら，たとえば，CLS を高低の2群に分け，さらにそれぞれを MAC の高低で2群に割って，SNS と DEP の関連のありようを追う，あるいは，CLS の高低2群のそれぞれに対して DEP を被説明変数とした階層的重回帰分析をかけてみる，ということもあり得よう．われわれはしかし，今回はそこまでの深追いをしなかった．ソーシャル・サポートの緩衝仮説を検証するそのことがわれわれの今回の試みの目的ではないからである．それぞれの変数の測定には，もとから，緩衝仮説を検証していくに耐えるほどに精緻な工夫は施されてもいないのである．

要　　約

われわれ１人びとりの日常生活は，ロビンソン・クルーソー的に自足的に展開されているのではない．それは，なん人もの他者との関係性のうちに進展しているのである．そして，このこと自体は誰にとっても異論のない自明のことである．しかし，ひととひととの関係性をどう把えどう記述しそこにいかなる意味付与をしていくかについては多くの視角と立場とが存在している．コミュニティ心理学や社会心理学，ひろくは行動科学の領域において，近年にわかに注目を集めだした「ソーシャル・サポート」の論議も，人間の社会関係についてのひとつの“新しい”立場であり，それは「日常の社会関係に包含されている相互援助機能」に焦点をあてている．すなわち，他者から得られる具体的および精神的援助が個人の心身の健康維持と増進に深く関与している可能性に注目するのである．

この可能性をめぐって理論的そして経験的な検討がある種の熱気をおびながら遂行されている．アメリカにおいてそれはとくに著しい．わが国においては，実質的な研究がようやくティク・オフしようとしているところである，といえよう．本稿では，そのティク・オフの流れに沿った，ひとつの予備的な探索的試みの結果が「資料」として報告・提示された．

（1）　ソーシャル・サポートが，①所属的サポート，②実体的サポート，③評価的サポート，および④尊重的サポート，の４側面にわたって問題とされた．それぞれのサポートが「実際に得られているのか」ということより．それぞれのサポートを「提供してくれると思われる他者の拡がり」が尋ねられた．いわゆる「ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ」に焦点があてられたのである．

（2） 大学生（2年生男女）を対象として質問紙による調査が試みられた．その結果，上記のごとく，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズを機能別に4つに分けて検討することが現実には難しいことが判明した．すなわち，問題としたサポート・ネットワーク・サイズの4側面には経験的弁別性がほとんど認められなかったのである．測定法をかえてさらに検討してみる必要性があろう．

（3） 以上から，サポート・ネットワーク・サイズの全体（包括的ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ）を指標として，まずは人口学的変数との関連が追究された．① 性，② 兄弟数，③ 入学経路，④ 居住形態，⑤ 1ケ月あたりの“自由に使えるお金”，および ⑥ “恋人”の有無，の6特性との関連が吟味されたが，いずれとも意味のある関連は見い出し得なかった．

（4） ついで，① 大学生活に対する満足の度合い，および，② 抑うつの程度の2種を基準変数として，それぞれに対して包括的ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ変数が持つ規定力が問われた．階層的重回帰分析の結果によれば，いずれの基準変数に対しても，そのヴァリエーションを説明していくうえで，有意味な独自の力を保持することが確認された．われわれの今回の試みにおいては，この確認が1番のポイントといえよう．

（5） 基準変数の「抑うつ傾向」に対しては，包括的ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズ変数が「マキャベリズム志向」変数と相乗効果を発揮している事実が見い出された．マキャベリズム志向が高いひとにあっては，ソーシャル・サポート・ネットワーク・サイズの拡がりは抑うつを低下させる方向で関与しているように思われる．

以上が，われわれの今回の試みにおける主要な結果である．それぞれの解釈にあたっては慎重な配慮が要求されよう．ひとつの事実にはちがいないが，どこまで“動かぬ事実”かについては，今回の試みだけではほとんどなにも言えぬからである．その意味において「資料」なのであり，ソーシャル・サポート研究の向後にむけて参考に供するものである．

引用文献

Antonucci, T., & Depner, C. E. (1982). Social support and informal helping relationships. In T. A. Wills (ed.), *Basic processes in helping relationships*. New York: Academic Press, pp. 233–254.

Barrera, M., Jr. (1986). Distinction between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, ***14***, 413–445.

Barrera, M., Jr., & Ainday, S. L. (1983). The structure of social support: A conceptual and empirical analysis. *Journal of Community Psychology*, ***11***, 133–143.

Brownell, A., & Shumaker, S. A. (1984). Social support: An introduction to a complex phenomenon. *Journal of Social Issues*, ***40***, 1–9.

Caplan, R. D. (1979). Social support, person-environment fit, and coping. In L. F. Furman & J. Gordis (eds.), *Mental health and the economy*. Kalamazoo, MI: UpJohn Institute for Employment Research.

Christe, R., & Geis, F. L. (1970). *Studies in Machiavellianism*. New York: Academic Press.

Cohen, J., & Cohen, P. (1975). *Applied multiple regression/correlation analysis for the behavioral sciences*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Cohen, S., & Syme, S. L. (1985). *Social support and health*. New York: Academic Press.

Cohen, S., & Wills, T. A. (1985). Stress, social support, and buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, ***98***, 310–357.

Depner, C.E., Wethington, E., & Ingersoll-Dayton, B. (1984). Social support: Methodological issues in design and measurement. *Journal of Social Issues*, ***40***, 37–54.

Gottlieb, B. H. (1978). The development and application of a classification scheme of informal helping behaviors. *Canadian Journal of Science*, ***10***, 105–115.

Gottlieb, B. H. (1981). *Social networks and social support*. Beverly Hills: Sage.

Gottlieb, B. H. (1985). Social support and the study of personal relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, ***2***, 351–375.

久田　満 (1987). ソーシャル・サポート研究の動向と今後の問題. 看護学研究, ***20***, 170–179.

House, J. (1981). *Work stress and social support*. Reading, MA: Addison-Wesley.

稲葉昭英・浦　光博・南　隆男 (1988).「ソーシャル・サポート」研究の現状と課題. 哲学, ***85***, 109–149.

Kahn, R. L., & Antonucci, T. C. (1980). Convoys over the life-course: Attachment, roles, and social support. In P.B. Baltes & O. G. Brim (eds.), *Life-span development and behavior* (*vol. 3*). New York: Academic Press, pp. 253–286.

Leavy, R. L. (1983). Social support and psychological disorder: A review. *Journal of Community Psychology*, ***11***, 3–21.

南　隆男・若林　満・佐野勝男・曽野佐紀子 (1977). わが国大学組織における学生の「自我同一性確立過程」の長期的追跡研究. 組織行動研究, ***1***, 5–38.

南　隆男・若林　満・西河正行・小林ポオル (1980). 大学組織における学生の自我同一性確立過程—総合的継時分析にむけての覚え書き—. 哲学, ***71***, 97–162.

Moos, R. H., & Mitchell, R. E. (1982). Social network resources and adaptation: A conceptual framework. In T. A. Wills (ed.), *Basic processes in helping relationships*. New York: Acapemic Press, pp. 213–23.

Sandler, I. N., & Barrera, M., Jr. (1984). Toward a multimethod approach to assessing the effects of social support. *American Journal of Community Psychology*, ***12***, 37–52.

Sarason, I. G., & Sarason, B. R. (1985). *Social support: Theory, research and applications*. The Hague, The Netherland: Martinus Nijoff Publishers.

Shumaker, S. A., & Brownell, A. (1984). Toward a theoy of social support: Closing conceptual gaps. *Journal of Social Issues*, ***40***, 11–36.

Silver, R. L., & Wortman, C. B. (1980). Coping with undesirable life events.

In J. Garber & M.E.P. Seligman (eds.), *Humman helplessness.* New York: Acdemic Press, pp. 279-340.

Thoits, P. A. (1982). Conceptual, methodological, and theoretical problems in studying social support as a buffer against stress. *Journal of Health and Social Behavior*, ***23***, 145-159.

Wilcox, B. L., & Vernberg, E. M. (1985). Conceptual and theoretical dilemmas facing social support. In I. G. Sarason & B. R. Sarason (eds.), *Social support: Theory, research and applications.* The Hague, the Netherland: Martinus Nijoff Publishers, pp. 3-20.

Wills, T. A. (1982). *Basic processes in helping relationships.* New York: Academic Press.